

12. 60年前の西興部市街

田尾要八

※明治25年3月29日生、徳島県出身。

市街になるまで

私は、大正8年2月に、義達一家を頼って、いまの西興部旧市街に入地した。入った家は、田中専松という人が、小さな一杯飲屋をしていたのを買い取り、ここで豆腐製造と飲食店を始めた。

場所は、いまの三浦さんの上隣り附近で、壁一重の隣に、前川徹堆さんが、私たちより2年程以前から住んでいて、説教所を兼ねていた。

私が入地したところから、地名は七重から瀬戸牛にvari始め、大正8年9月に、現市街の宅地割がされて、国道が目黒（一馬）さん附近から、旧市街を通っていたのを、いまのように切替えられた。

いまの瀬戸牛市街地域には、人家は殆どなく、旧市街の義連本家（将弘）附近で、義達高蔵が雑貨店を開き、近くに中田真吉、村尾知逸が居り、三浦さんの石倉庫附近に、小林通の雑貨店（川勝の後）があり、二階建の旅館跡（渡部徳次）の空家があった。

また甲谷良平という呉服の背負い商いをしている人が居った。

その外、忍路子入口（野田忠雄のキジ養殖附近）の三角地域に、出口善兵衛の飲食店、安部時平さんの宿屋、宮木という人の料理屋や、鍛冶屋（衣川金次郎）もあった。

農家では、国本さんのお寺附近に佐藤一がおり、大行寺附近に伊藤栄祐さんの祖父さんが居たくらいで、そのほか、興部川の天狗橋を渡った川向いに、神様斉藤（良治）が、下の川向いに畠野三五郎、菅原さんがいた程度で、人家は数える程しかなかった。

区画割りされた頃の瀬戸牛は、いまの清水食堂から神社下一帯にかけて、広い湿地の葦原でどうにもならない場所だった。

神社下や、湿地からしみ出た水は、小さな川になり、いまの駅と官舎の間を通過して、三浦公園の方に流れていたが、国道がつけられ、素掘りの側溝が入ってから、だんだん乾くようになった。

私が今の場所に店を構える時も、駅の建設予定地の前にと考えたが、湿地でどうにもならず、いまの場所を選んだのだ。此所には大きなナラの切株が四つあって、掘り起して整地するのに一カ月近くもかかった。道具と言えば鍬一丁だけで、あとは、木の棒を挺にして掘り起すしか方法がなく、木の株一つ掘るにもこんな苦勞をしたものだ。

鉄道の魔術

私が今の場所に店を構えたのは、大正9年春で、このころ瀬戸牛の商店の地域になるところには、まだ一軒の家もなかった。

翌年（10年）10月には、鉄道が開通したが、私家が建ててから僅か一年半足らずのうちに、100戸近い家が建設されて、市街が形づくられてしまった。

たとえ掘立てに近い家でも、こんな短かい期間に、これだけの市街ができたのは、私でさえ驚いているし、其の後転住して来た人たちは、この事実をなかなか信用しなかった。

こんなに急激に家が建っても、大正8年に、義達貞太郎さんや、一ノ橋の村上さん等

の地主が、宅地割をしていたので、いまと同じような整然とした町並みが、初めからできたのだ。

開拓時は不便だったので、道路一本の開通や、鉄道が敷かれるとなると、地方に大変動があったことは、瀬戸牛がその良い例だ。

3月の豆蒔き

この話は、節分の豆まきでなく、畑に豆の種を蒔いた話だ。

私は大正8年の2月に旧市街に到着し、店の段取りが済むと、体をもて余すようになった。家の周囲は小さな木の残っている荒地だったが、この木を伐り、3尺（1メートル弱）ほどの雪を、川のがけ下に投げて荒地耕しをした。雪の下はしばれていないので、ここに豆の種を蒔いたのだ。来たばかりで、何時雪が消えるのか、何月ころ作付けするのかも知らず、早く蒔けば早く穫れると思い込んでいたのだ。

そのあと、掘り返した畑はカンカンにしばれるし、雪もまた積って大失敗だったが、蒔いた種は余り腐りもせずに、秋に僅かでも収穫したから、不思議なものだった。

雑穀買いと農業

大正9年ころから私は雑穀買いもやった。その頃、小豆、大豆、中長、青えんどう、手亡などの豆類がよく穫れたが、欧州大戦後の不景気で、手亡を1枚80銭の吠に入れて、名寄まで持って行って、2円30銭にしかならず、散々な目にあったことがある。

澱粉も1袋3円20銭まで暴落して、澱粉工場が、次々に倒産したのもこのころだ。

大正13年には、雑穀景気が持ち直し、白米1俵15円前後の時に、青えんどう1俵が13円20銭で、13屯車2車分を買い込んで小樽に送った。また小豆も、1車に208俵積み、4車分832俵を、東京秋葉原に直送した。これは綺麗に磨いたものだった。

その頃は、浅川、斉藤さんも仲買いをしていたので、村内から出る雑穀は相当な数量だった。それだから、豆選び（豆より）の女の人や、山谷という俵作りの専門の人を、3軒で共同で頼んでいた。

昭和8年に、私は店を家の者に或る程度任せ、六興で農業をやった。明治時代から開拓された六興には、そのころでも未開地が残っており、平間盛吾さんや、村上勝治さんの居た附近は開拓されない荒山で、ここを私が開墾したのだ。開拓者は、農業だけでは生活できず、何かの形で造材に頼っていたので、農業には余り力が入らず、村のあちこちに、未開地が残ったのだろう。

此所で、下川の谷井（やつい）農場から、ドイツ薯一俵を買い入れてこれを殖やした。良い薯だったので、種薯を譲ってくれと言われて、方々に分譲したが、大分増殖されたはずだ。

大正8年ころの農家の履物は、まだ手作りの木綿糸で刺した足袋だったが、私は徳島から裏ゴムの地下足袋を初めて仕入れて販売したが、地下足袋使用の初まりと思う。

六興の開墾の傍ら、新しい産業を興そうと考え、孟宗竹の根を、ビール箱2つも内地から取り寄せ、試作したが、2尺位しか伸びず大失敗したことがあった。